

アルザスの風に吹かれて

——1年間の交換留学を終えて——

目黒 純子

はじめに

留学することが珍しくなくなった今、その選択の幅も広がっている。フランスの場合、語学留学や大学正規留学はじめ、世界的なレベルの高さから美術、料理、服飾の専門学校、最近では香水の調香師やワインのソムリエを養成する学校などへの留学があげられるだろう。いずれの留学においても、各人が将来的な目標を念頭におきながら、その目的を定めていることであろう。とりわけ、大学生は、卒業後多くの人が就職、進学という立場におかれているため、在学中に留学を考えている人も多いと思われる。本稿では、大学の交換留学制度というシステムのもとで、1年間フランスに留学した私の体験を述べてみたいと思う。交換留学を考えている大学生はじめ、フランスに留学したい多くの方の参考としていくらかでも役立てば幸いである。

交換留学制度とは

昨今、多くの大学において交換留学が活発に行われている。日本で学びたい外国人学生と外国で学びたい日本人学生とのお互いの希望が叶えられる有益な制度であると思われる。成城大学においてもアメリカ、ベルギー、フランスの3カ国の大学と交換留学が実施されている。国際交流室が窓口となっているので、興味のある人は早めに足を運んでみるとよいだろう。フランスとの交換留学では、アルザス地方の中心都市のストラスブールのマルク・ブロック大学と協定を結んでおり、お互いに各1名ずつの留学生を受け入れている。留学生選抜試験は毎年2月上旬から中旬に実施され、受験者は仏検2級もしくは DELF - A4 以上を取得していなければならない。(11月中旬頃説明会があるので希望者は参

加のこと)しかし、通常フランスの大学に正規に入学(DEUG、Licence、Maîtrise の課程) するとなると、この程度の資格では極めて困難であろう。外国人が正規に入学するには、DELF 以上の DALF 取得あるいはフランス大学独自の外国人のためのフランス語の試験が義務づけられ、それを突破しなければならない。(正規留学の詳細を知りたい方はフランス大使館で確認のこと)したがって、少なくとも成城大学の場合の交換留学は、語学力に多少問題を抱えている学生にとって、1年間という期限付きではあっても、正規に大学に入れる大きなチャンスなのである。私は大学院に入った当初からこの制度を是非利用したいと思っていた。なによりも、できるだけ早い時期にフランスの大学で学ぶことが、これから研究していく上で大切なのではないかと考えていたからである。しかし、そこには大きな落とし穴があることに注意しなければならなかった。

いざ留学

上にも述べているように、交換留学は語学力に多少問題のある学生でも正規に大学に入れるチャンスを与えてくれている。アルザス成城の出身者でもなければ、とにかく長期間フランスに滞在したことのなかった私は、まさにこの“語学力に問題のある学生”であった。そのことは自分でも自覚していたため、大学に入る前にパリで2ヶ月間語学学校に通うことに決めた。初めて留学する際、語学力、とくに会話力、オーラルに自信のない人は語学学校で耳を慣らしておくといだろう。しかし、2ヶ月程度では本当に少し慣れる程度で、口頭表現もまだまだ思うようにできないし、聞き取りもかなり怪しい...特にフランス語での電話のやり取りには緊張を強いられた。このことから、せめて作文力だけでも日本で準備していくべきだと痛感した。作文力は、日本の大学の授業時間内では極めて難しいので、図書館で参考書を借りるのが一番手っ取り早いだろう。また、時間と金銭的な余裕のある人は、東京日仏学院のDissertationの授業や通信講座の上級和文仏訳の受講をお勧めしたい。

留学 —1週間目—

パリでの語学研修を終え、9月30日にストラスブールに降り立った。10月1日から大学寮に入れることになっているので、その日はホテルに宿泊しなけれ

ばならない。トランクにリュック、両方合わせて 30 キロを優に超える重さなので、荷物を持ってのホテル探しはとうてい無理だった。駅の一時荷物置き場に預けたとき、そこで、ここはパリじゃないドイツ国境のストラスブルだということを実感する。荷物置き場のおじさんが婦人と流暢に話している言語、それはドイツ語だった。パリでは在外研究で滞在されていた北山研二先生はじめ、多くの日本人に囲まれて生活してきた。道を歩いていてもメトロの中でも至るところで日本人をみかけた。同郷人、それは私に無意識に安心感を与えてくれていたのだった。しかし、ここストラスブルでは日本人の、またフランス人の知り合いもない。何か問題が起きたら、対処するのは自分の話すフランス語だ。そんな思いに駆られながら第 1 日目をストラスブルの駅前の安ホテルで過ごした。

2 日目、いよいよマルク・ブロック大学に赴く日だ。午前中に入寮の手続きを済ませようとしたが、入寮の初日のため、多くの学生たちが受け付け前に列をつくり、鍵をもらうまでに 3 時間ちかく外で待たされる。寒い。厚手の T シャツにフリースを着ていたにも関わらず震えがとまらない。10 月のストラスブルは気温 10 度前後、すっかり秋だ。また、並んでいる学生のほとんどが車で来ているフランス人であったために、荷物は軽量である。重い荷物を背負って、周りのフランス人学生たちの言っているフランス語を全く理解できずにいる不安げな様子をしたアジア系学生は私以外見当たらないように思われた。(しかし、実際には多くの日本人留学生がその寮で暮らしていた。)

寒さと不安のなか、入寮をすませ、荷物整理もままならないうちに大学へと足を運んだ。フランスの大学というとパリのソルボンヌのように石でできた重厚な建物を想像していたのだが、ストラスブルの大学はガラス張りの近代的な建物であったため少し面食らった。ストラスブルは一つの敷地に 3 つの大学(マルク・ブロック大学、ロベール・シューマン大学、ルイ・パストゥール大学)が共存しており、そのためその一帯はちょっとした小さな大学都市のようになっている。留学前に成城大学の国際交流室のほうから大学生活の手引き(フランス語)と前交換留学生の留学マニュアルを頂いていたのが大変役に立った。手引きには大学構内の地図が記載されており、どの建物がどの大学の何学部であるか示されている。留学マニュアルのほうは、留学生が行う様々な手続

きの場所がどの建物の何階の何号室かを詳しく説明してくれていた。前任者の方のこうした配慮は大変有り難い。もし留学する先が初めて訪れる場所、また留学自体が初めてである場合は、なるべく日本で得られる留学情報は取得しておいたほうがよいと思う。交換留学においては、同じ大学の先輩から、またロータリー財団などの奨学生の場合においても前任者がいることが多いので、そういった方々から現地の状況を事前に聞いておくことは留学生生活をスムーズに遂行できる要素であろう。私は、初めての留学に浮き足立っていたせいもあり、このことに関して十分な情報を得るための準備をしていなかった。そのため、後に大学寮のことでちょっとしたトラブルがおこる。授業期間中の生活面でのトラブルは精神的な負担を強いられ、研究にも支障をきたしてしまう。そうならない為に、十分な下準備と先人達のアドバイス等は自分から積極的に情報を得るように心掛けていくことが必要だと思う。

3日目、大学内での緒手続きを取るため、まず交換留学生をお世話してくれる国際交流センターに行く。ところで、近年ヨーロッパにおいては、EUの発足とともにEU圏内でユーロ導入など様々な統合が試みられている。文化交流の一貫としても、ヨーロッパ各国で、大学生の交換留学が積極的な動きを見せているようだ。マルク・ブロック大学においても、“エラスムス”という名称でヨーロッパの学生を対象とした交換留学制度を確立し、多くの留学生を受け入れている。私が国際交流センターに行ったときも多くのヨーロッパの学生が部屋のなかにいた。ヨーロッパの学生といえども交換留学生のなかにはまだ語学的にフランス語が十分でない学生もいて、少し安心した。国際交流センターの事務の方からオリエンテーションの日程と私の所属する文学部 *Maîtrise* 課程の授業登録の仕方を丁寧に教えて頂く。交換留学の強みはこうした留学生のための窓口があるため、フランス人学生との交流会の催しや問題が起きたときに相談ののってもらえる。

国際交流センターが企画した留学生のためのオリエンテーションでは、1日3時間程度、3日間にわたって、大学の建物の案内、図書館やパソコン室、スポーツセンター、学食の利用法、コピーカードの使い方などを教えてもらえる。また、それは留学生の友達をつくれる絶好の機会でもある。留学生内でフランス語力に差があったとしても、友達になるのにはそのことはあまり問題ではない

ように思われる。フランスが地理的には近くであるヨーロッパの留学生においても、一人でフランスへ来ていることが多い。友達をつくり早く大学生生活に馴染みたいという気持ちはどの国の人も同じであるのだ。

こうして、ストラスブルに降り立って最初の1週間はまたたく間に過ぎた。その週の土日は何をしていたのか全く覚えていないし、手帳を見ても空白のままである。生活用品などを揃えるために買物などで外出していたに違いないが、しかしあとは疲れてベッドに横たわっていたのではないかと思われる。ストラスブルへの到着の安堵感と来週から始まる授業の緊張とが入り混じった週末であったのであろう。

授業開始！

10月6日、月曜日、午前9時から授業が始まった。シラバスに記載されていた教室の前で先生を待つ。Maîtriseは大学4年目の課程なので、学生同士はほとんど顔馴染みである。休みあけの久しぶりの再会であろうかフランス風の挨拶、ピース（軽く頬にキスをする）が学生同士で交わされている。一人でいる学生も数人いるが、アジア系の学生は見当たらない。日本人は一人であろうかと不安が横切る。不安は的中した。しかし、誰か同郷人が来てくれないかと内心期待していた自分が情けない。私は自分で希望してフランスに留学しているのだ。日本人に頼っていたら、留学している意味がないではないか。そんな思いで私は教室の中にはいり、授業内容を録音するために一番前に座った。

最初の授業は“19世紀のフランス文学”。バルザックのウジェニー・グランデとゴンクール兄弟のルネ・モウペランを題材にして、“写実のレトリック” La rhétorique du réel について考察するものであったが、まず始めに先生から授業の進行の仕方、成績の評価について説明を受ける。授業進行のほうは、最初の2、3回は先生の講義で、後は学生の発表 *exposé*、成績の評価については *exposé* で決まるということであった。そこで、いきなり *exposé* の題目と日程、また参考文献が配られた。その場で自分の担当を決めろというのだ。先生が題目をひとつひとつ読み上げ、その題目での *exposé* を希望する学生が手をあげる。題材も読んでいないし、題目の意味も全て把握できない私にその要求は無理であった。とりあえず、その場では何もできなかった。しかし、授業が終わった後で、*exposé*

の題目を選んでいないこと、皆の前での exposé は今の私には難しいということ
を先生に正直に伝えたところ、レポートで構わないという回答であり、少し安
心できた。結果的に授業日数に比べて学生数が倍以上であったことから、半
分以上の学生がレポート提出であった。

講義内容はバルザックに関する単語はかろうじて聞き取れるものの、語学学
校の教員とは全く違うフランス語に驚嘆した。語学学校では、比較的平易なフ
ランス語で話し、早さも意識的に遅くしてくれる先生が多い。そのようなフ
ランス語から大学での講義のフランス語は比較できないほど難しい。隣の人のノ
ートを盗み見しながら、聞き取れた単語、または平易なフランス語を書いては
いたが、綴りは間違いだらけ、そのうえ何が書きたいのかさっぱりわからない。
これでは、まずいと思い、隣の学生に授業後、ノートを貸して下さいとお願い
したが、渋る態度に驚いた。明らかに留学生だと分かる私に手助けしてくれる
姿勢ではないのだ。後に、以前フランスに留学していた末永朱胤先生にそのこ
とを話すと、「彼らにとって、自分のノートは財産であるため、簡単にそれを人
に受け渡すことはできないのだよ」と教えられた。日本で他人のノートのコピー
を取って、試験に望んでいた自分が急に恥ずかしくなった。これからは、自分
で何とかやっけていこう。その上で理解できない点は教えてもらおうと思った。
自分なりに努力している姿を見せれば、フランス人も親切な対応で応じてくれ
る。ただ、彼らにはフランス語が十分でない学生がなぜ留学しているのか、先
生の講義が理解できないのに授業に出席する意味があるのか分からなかったに
違いない。多くの Maîtrise 課程の留学生は、ほとんどフランス語力に関して問
題がないからだ。

講義、下準備、Exposé そして評価...

緊張のもとでの最初の授業を終え、単位取得の不安はあったものの、自分の
登録した授業には休まず出席していた。私の選択した授業は、前述した“19 世
紀のフランス文学”と“20 世紀のフランス文学”、“比較文学”の 3 つだった。たっ
た 3 つの講義と思われるかもしれない。しかし、どの授業も同じ形式で学生の
授業内での発表 exposé が課せられている。一つの課題に対して exposé の時間は
40 分くらいで、20 分が先生のコメントというような時間配分になっており、一

回の授業 120 分で 2 つの *exposé* をすることになっている。40 分近く口頭で話すということは最低でもワープロの A4 用紙に 8 枚は書かなくてはならない。もちろんフランス語で。“19 世紀のフランス文学”の授業のようにレポートになったとしてもその量は減らすことはできない。

まず、講義で取り上げられる題材の原文から読むことから始めた。一冊が文庫で約 250 ページちかくある。日本での学部での授業では一冊を 1 年間かけて読んでいた。大学院に入り、多少読むスピードが上がったとしても 250 ページを読むのにどのくらい日数がかかるのか検討がつかない。本を手にとったときにはため息がこぼれた。それでも、単語を引きながら読みすすめた。小説は哲学や批評文と違って、単語は難しいが大まかな意味はつかめるので、分からないところは飛ばしながらも話の筋をおっていくことができる。自分に課せられた課題に関係する箇所は付箋で印をつけておき、後で論を進めながら、引用として使う。

次に、自分の課題に関係のある参考文献を探し、読んでいく。こうした手順は日本もフランスも変わることはない。批評文になると難しく、時間もかかる。あまりに理解不能な文献は時間的な制限もあるので却下しなければならない。悲しくも語学力に問題のある学生のハンデである。私の場合、一つの課題で、読める参考文献は多くても 5、6 冊程度であった。少ないときには 2 冊なんてこともあった。フランス人の学生は通常 10 冊以上の参考文献を挙げてくる。準備万全で *exposé* に望む姿勢は日本の学生との大きな違いであるように感じられた。

フランスにおいて、レポートや *exposé* の原稿を書く上で欠かせないこと、それは決められた論文形式で書くことであった。それは、それほど難しいことではない。序文 *introduction* で自分の主張と、論のプランを明確にすること、プランはなるべく 3 つ (フランスでは定立 *thèse*、反定立 *antithèse*、総合 *synthèse* に分類することが論を述べる基準となっている) に分類すること、結論 *conclusion* を記すことである。フランスでは人文系の大学入学試験が、日本のように穴埋めであったり、マークシートではなく、小論文 *dissertation* で行われるようだ。したがって、高校生の時から論文の書き方の訓練を受けている。こうした論文形式は一度覚えてしまえば、論を進めるのに大きな助けとなるし、合理的であるようにも感じられる。前期の授業で提出したレポートや *exposé* の原稿は、ま

だその形式を十分に理解していなく、今からみても散々なものであるが、後期のものは、中味は別として形式だけはフランスに準じているように思われる。

レポートにせよ、exposé にせよ原稿を書いている時は、自分の論が課題に適切であるか不安で食欲も落ちるほどであった。1日中家にいて机に座っていると、逆に勉強の効率が落ちるので、近くの広場や公園に行ったり、行きつけのカフェで本を読んだり、日本人の友人とおしゃべりしたりと気分転換には気を配った。楽天家の私であっても、海外での一人暮らしは思ったより精神的に追い詰められた。日本語で誰にも相談のできない状況は自分を内に閉じこめ、精神的な不安を引き起こす。しかし、こういったことはどの国の留学生、また私達の先輩方も経験していることであり、何も特別なことではない。Exposé が終わって寝こんでしまった先輩に比べて、終わった解放感から呑気に映画に行った私はまだまだ追い詰められていなかったのだ。恥ずかしいかぎりである。

評価については、フランス人の先生は即座に点数をつけ、最後の授業内で皆の前で発表するか、先生の研究室の扉に点数が貼り出してある。私の評価は一つだけ平均に達していたものの、あとは合格点ギリギリであった。出席点というものはなく、自分の発表したものだけで評価されるという厳しいものである。自分で出来るかぎりのことをして、最低な点数がつけられて落胆したが、しかし出来映えの良くないものに対して良くない点数をつけるというのは当たり前のことである。落胆してはられない。今度また留学する時にはしっかり日本で実力をつけて、フランス人と対等に張り合う自分でいなければならないのだから...

おわりに

留学前に西節夫先生からこんな言葉を頂いていた。「最初の留学だから、何か一つだけ身につけて帰ってきなさい」。私はこのように言われたときに、正直、一つだけだって？ もっとたくさんものを身につけて帰りたいのに！と少し反発感を覚えていた。留学という“私の長年の夢”が現実になるという大きな喜びだけが先走っていた。

私と同様に、留学あるいは海外生活に憧れている人は多いと思う。交換留学のように1年間という制限があればなおさらのこと、限られた時間内にあれも

これも吸収したいと欲張るものだ。しかし、多くの目標をかかっていると、そのどれも中途半端に終わってしまうことが多い。先生のご忠告は正しかった。一つの目標をクリアすれば、その留学は成功したといってよいだろう。

ここに記したように私の留学生活は落胆の連続だった。しかし、帰国してこのように振りかえる機会があると、はじめてその体験が貴重なものであったことがわかる。ストラスブールは冬の寒さを除けば、街の規模も生活環境も留学に適していると思われる。街が川で囲まれているので、私は落ち込んだ時、よく川沿いを散歩したものだ。アルザスの風は乾いていてとても心地よい。その風は私の気持ちを一新させ、フランスで何をすべきか導いてくれたように思われる。次にフランスへ交換留学される人もこうした肌で感じる瞬間を持ってほしい。きっと、フランスという地に立ったことで何かが変化している自分に気付くだろう。

A Z U R

本記事は、成城大学フランス語フランス文化研究会の
機関誌『AZUR』第5号(2004年3月発行)に掲載されました。

成城大学フランス語フランス文化研究会

Société d'étude de la langue et de la culture françaises
de l'Université Seijo

http://www.seijo.ac.jp/graduate/gslit/orig/areas/europe/azur_index.html